

京都外国語大学

➡ KYOTO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

新設・国際貢献学部の新核は 国内外の地域社会と連携・協働する コミュニティエンゲージメント。 本気の挑戦が失敗をも前進に

19もの言語を学ぶことができる伝統ある外国語大学として知られる京都外国語大学が、2018年4月、「国際貢献学部」を新設する。グローバルスタディーズ学科とグローバル観光学科で構成されるこの新学部が教育の中核に据えるのは、学生が国内外の地域での課題解決に取り組む「コミュニティエンゲージメント」。本気で挑戦し、失敗も前進に変えるこの独特な教育プログラムのねらいとは？

取材・文／伊藤敬太郎

私立大学ではトップクラスの 19言語を学ぶことができる

京都外国語大学は、国際文化観光都市・京都の地で、長年にわたりグローバル人材の育成に取り組んできた。

その教育の大きな特色の一つは、多彩な外国語教育だ。

同大学では、英語、スペイン語、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、中国語、イタリア語の専攻語のほか、第二外国語としてアラビア語、オランダ語、コリア語、ロシア語、第三外国語としてラテン語、ギリシア語、インドネシア語、トルコ語、インド語、タイ語、ベトナム語、スワヒリ語の19言語を学ぶことができる。これは私立の外国語大学としてはトップクラスの数。学科の枠を超えて複数の言語を学ぶことも可能だ。

このほか、マルチリンガルの育成のため、英語と他の外国語の2人の教員によるチームティーチングで行う「2言語同時学習」も特徴的な教育手法。

留学プログラムの拡充・整備にも積極的で、2015年には交流協定を結ぶ国立マレーシア科学大学内に「KUFS-USM

Japanese Cultural Centre」(通称：京都外大マレーシアベナンキャンパス)が開設されている。

一方、同大学が目指すのは外国語のスキル強化だけではない。真にグローバルな舞台で活躍できる人材を育成するため、反転授業型アクティブラーニングやProject-Based Learning (PBL)を導入。学生の「人間力」養成に向けた教育改革も活発に進められている。

そして、人間力を育てる取り組みの集大成ともいえるのが、既存の国際教養学科を発展させるかたちで2018年4月に新設される「国際貢献学部」だ。同学

部には、国際協力コース、グローバルビジネスコースを擁する「グローバルスタディーズ学科」と、観光政策コース、観光ビジネスコースを擁する「グローバル観光学科」の2学科が設置される(図1)。

世界の諸問題を解決に導く チェンジメーカーを育成

この新学部の特色を、松田武学長は次のように解説する。

「国際貢献というと、国際機関やNGOでの活動などがイメージされますが、本学では、国際貢献学を、ビジネスの領域

学園創立70周年記念事業として新たに生まれ変わった4号館。国際交流や外国語の自律学習支援のための施設を備えたグローバル教育の拠点だ

図1 京都外国語大学の学部・学科編成

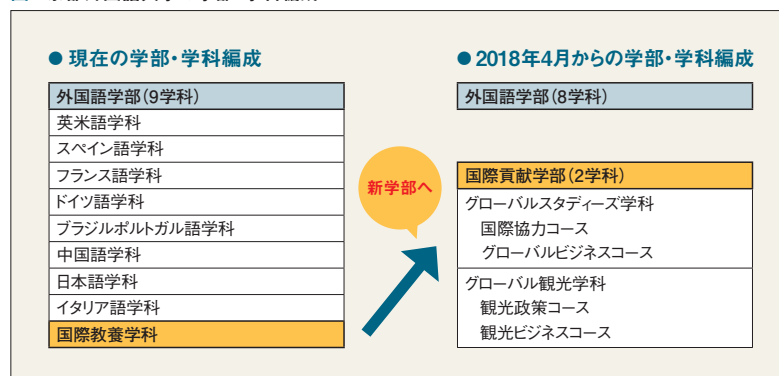
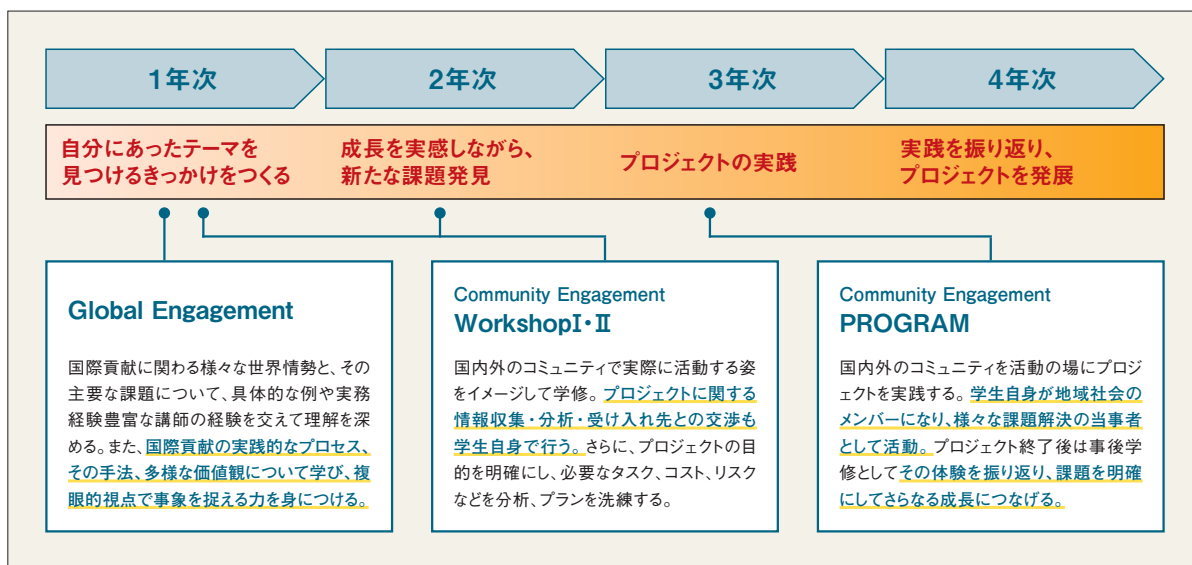


図2 コミュニティエンゲージメントを中核に据えた学びのステップ



も含めてより広義にとらえています。グローバル化の進展にともない、ヒト・モノ・カネが自由に国境を越えて私たちの生活に影響を及ぼしている現在、ビジネスにおいても新しい課題が次々に生まれてきます。国際貢献学部では、語学に加え、社会科学の技法も身に付けることで、国内外の課題を解決する“チェンジメーカー”を育てます」

語学、異文化理解などの人文科学と、政治学、国際関係論、国際法・人権、経済学、経営学などの社会科学が融合した教育に取り組む国際貢献学部。この学際的な学びを経験の面から血肉化するのが、実践型の学習プログラムである「コミュニティエンゲージメント」だ。

キャンパスの外に出て、5〜7週間にわ



松田 武学長

たり国内外の地域や企業の人々と連携・協働するこのプログラムは、国際貢献学部の教育の中核を成している。

ポイントは、単に学外での実践に取り組むだけではないということ。図2に示した通り、実践に向けた準備は入学直後からスタートする。

1年次の前半は、グローバルに活躍する著名人の講義を通して、刺激を受けながら自分が興味をもてるテーマを選択。どのプログラムにチャレンジするかを決めたら、1年次の後半はそのために必要な知識やスキルを習得。2年次の前半には、テーマに対する問題意識を高めつつ、自分自身でプロジェクトの計画を立てる。

計画・行動・振り返り・挑戦のサイクルで成長を促す

このような積み重ねが2年次後半から3年次前半までに取り組む実践へと集約されていく。同学部では、卒業に必要な単位のうち、約半分が、コミュニティエンゲージメント関連の科目だ。

学生のアカデミックな成長とともに、人間的な成長をも促すこの学びのメカニ

図3 成長を促す学びのサイクル

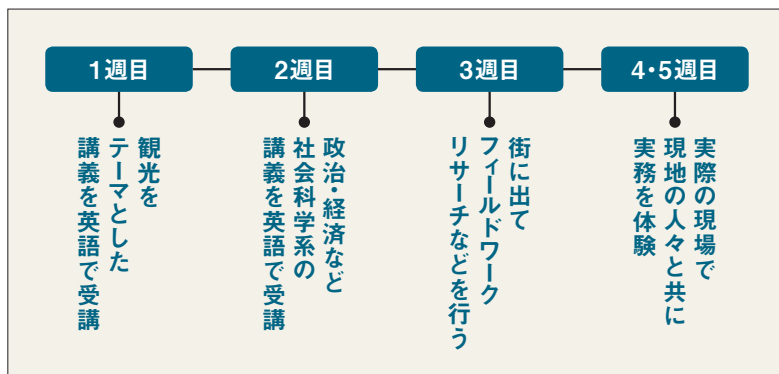


ズムを説明するのが図3だ。教員の指示に従って動くのではなく、自分の問題意識に基づき、自分で計画し、現場に飛び込んでいくことは、学生にとってハードルが高いが、だからこそ意味がある。

「いくら計画を立てても、未知の領域にチャレンジするわけですから、思うようにいかないことも当然あります。そのような挫折や失敗について、『なぜそうなったのか』『何が足りなかったのか』をしっかりと振り返ることで、前進し、次の挑戦につなげることができるのです」

本気でチャレンジするからこそ、失敗の痛手が次の学びへのきっかけとなり、大きく成長できる。長い準備期間やその

図5 「国立マレーシア科学大学と連携大学の講義 + ペナンでの実務を体験するプログラム」の流れ



間の積み重ねは、「本気」を醸成するためにも必要なのだ。

コミュニティエンゲージメントでの経験は、3・4年次での、ゼミでの研究活動や卒業論文にも色濃く反映されていく。

このように国際貢献学部での4年間の学びは、全体が図3のサイクルを描くようにデザインされている。同様に、例えば、1・2年次のワークショップにおけるグループワークなど、日々の学びのなかでも、小さなサイクルが繰り返されていく。この「計画」から「新たな挑戦」に至るサイクルを自分のものにすることで、社会に出てからも自力で成長できる力へとつながっていくのだ。

実習先は北中米、アジアから日本国内まで多彩

続いて、実習の具体的な内容を見ていこう。

現在、コミュニティエンゲージメントとして用意されている主なプログラムは図4の通り。実習先は、アメリカ、カナダ、ニカラグアといった北中米諸国、マレーシア、ベトナム、タイ、シンガポール、香港といったアジア諸国、オーストラリア、さらに京都をはじめとする国内の観光地とバラエティに富んでいる。

プログラムの内容も、現地企業での課題解決型インターンシップ、地域でのサービスラーニング、フィールドワーク、さらに現地大学での学びと地域での実践を組み合わせるものまで幅広い。

プログラムの流れはそれぞれ異なる

が、例えば、「国立マレーシア科学大学と連携大学の講義+ペナンでの実務を体験するプログラム」は、5週間を図5のように過ごす。現地の大学での英語による学習、地域でのフィールドワーク、公共・福祉施設等での実務を、段階を追ってまとめて経験できる濃密な内容だ。

社会や地域に貢献するために必要なスキルとして語学を鍛える

「留学とは異なり、例えば、現地の福祉施設などで活動することにより、学生はキャンパスの中だけでは得られない大きなものを感じとり、成長できるはずだ。『語学+a』としての実践ではなく、『社会や地域のために何かをしたい。そのために語学を修得しなければ』というスタンスで取り組んでほしい」

また、コミュニティエンゲージメント以外に、併せてチャレンジできる「オフキャンパス・プログラム」も用意。こちらも国内外の実習先で、「京都のユネスコスクール加盟校を訪れワークショップを展開」「国連本部や政府機関で外交の現場を知る」「平和のコミュニティーを築くために劣悪な住環境を改善」など魅力的なテーマに取り組むことができ、単位認定もされる。

国際貢献学部の教育は、挑戦し、失敗から学ぶなかで、語学力、専門能力、実践力、人間力を総合的に高めていく。その成果は、社会に出てからも成長し続ける「チェンジメーカー」たちが、近い将来、証明することになるだろう。

図4 主要プログラム一覧

国立マレーシア科学大学と連携大学の講義+ペナンでの実務を体験するプログラム

実習先国 →

オーストラリアの大学で英語力を磨き、地域貢献に取り組む

実習先国 →

カナダの企業でインターンシップ 企業活動のグローバルな可能性を探る

実習先国 →

海外で旅行会社の実務を体験しながら地域の観光政策に貢献

実習先国 →

海外企業インターンシップを体験し、香港の大学生との課題解決に取り組む

実習先国 →

外国人に人気の温泉地で観光まちづくりを学ぶ

実習先国 →

中米ニカラグアの大学と協働で実践的地域研究を行う

実習先国 →